

山寺遺跡

—— 緊急発掘調査報告書 ——

1981

茅野市教育委員会

序 文

山寺遺跡は、茅野市において平安時代の遺跡の中でも早くから知られており、茅野市の古代史を解明する上から貴重な遺跡として注目されていた。過去において、豊平村誌編纂会による調査があり、住居址等の遺構が発見されていた。

今回、遺跡の一部に宅地造成が行われることとなり、記録保存を目的とした発掘調査が茅野市教育委員会により実施された。発見された遺構は平安時代の住居址二軒だけであったが、この地のかなり広い範囲にわたり、古代の村がつくられていたことが裏付けられた。近時、市内の平安時代の遺跡の調査が進み、この時期の大きな集落は上川沖積地の周辺に立地し、八ヶ岳山麓台地では一・二軒の小規模の遺跡が多いことが判明して来た。この中において、山寺遺跡はそれらとは多少性格を異にするものである。山寺は、官牧「大塩牧」とゆかりを持つ地ではなかろうかと言われているが、それらとの関連において、今後解明さるべきいくつかの問題を蔵する遺跡ということができよう。

発掘調査は三恵不動産商事の委託により行われたものであるが、幸い全面的なご協力をいただき、ささやかながら報告書を刊行する運びとなった。また、発掘については調査委員会をはじめとして、大勢の方々のご尽力をいただいたが、これら関係の皆様の労に対し心から感謝申し上げる次第である。

昭和59年3月

茅野市教育委員会

教育長 小島与四男

目 次

序 文 例 言

I	はじめに	1
II	位置および環境	2
III	発掘調査の経過	4
IV	発掘区の土層の状態	4
V	遺構	5
VI	遺物	7
VII	まとめ	10

図版目次

第一図版	上：遺跡全景（西より）	下：遺跡全景（白山神社の森）
第二図版	上：遺跡全景（南より）	下：発掘状況
第三図版	上：発掘状況	下：第4号住居址
第四図版	上：第4号住居址カマド	下：第4号住居址カマド
第五図版	上：第4号住居址遺物出土状態	下：第4号住居址出土土器
第六図版	上：第5号住居址	下：第5号住居址

例 言

- 1 本書は、(有)三恵不動産商事による宅地造成に伴う長野県茅野市山寺遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は山寺遺跡調査委員会が(有)三恵不動産商事より委託を受けて行ったものであり、発掘調査は昭和56年11月9日から12月3日まで行った。
- 3 本書の作成・原稿執筆は宮坂虎次が行い、鶴飼幸雄と守矢昌文がこれを補助した。
- 4 出土品・諸記録は茅野市尖石考古館で保管している。
- 5 図版一・二は、信濃第20巻第4号「長野県茅野市山寺遺跡について」宮坂虎次より転載した。

I はじめに

遺跡の所在する字山寺は茅野市豊平南大塩の一部であるが、南大塩の旧郷といわれ、産土神白山神社と八幡神社の二社がほぼ500mへだてて位置する。また、地名の示すごとく往昔相当大規模の密教系の寺院があり、正応年間に神宮寺(諏訪市中洲)に下るとの口碑が伝えられている。一帯には大坊屋敷・仁王堂・施餓鬼山・経塚などの地名があり、白山神社脇の毘沙門堂には木彫の雲中供養佛かと思われる佛体や、毘沙門天像・五輪塔が保存されている。

この二社間の南斜面は、土師器・須恵器が出土することで古くから知られていた。明治年間、白山神社前の畑から土師器坏5個が発見されたことが記録され、その後各所から耕作に伴って土師器の盃・高坏・皿・碗が出土したようである。昭和32年には牛蒡掘りをしていたところ石組遺構が発見され、調査の結果、石組の竈をもつ平安時代の住居址であることが判明した。たまたま「豊年村誌」の編さんが進行中で、この地が古代官牧に関係をもつやにうかがわれているところから、その資料を収集する目的で昭和33・34年に小規模ながら発掘を行い、計3ヶ所の平安時代の住居址を調査することができた。またその後水田造成工事の際に古井戸址が発見された。

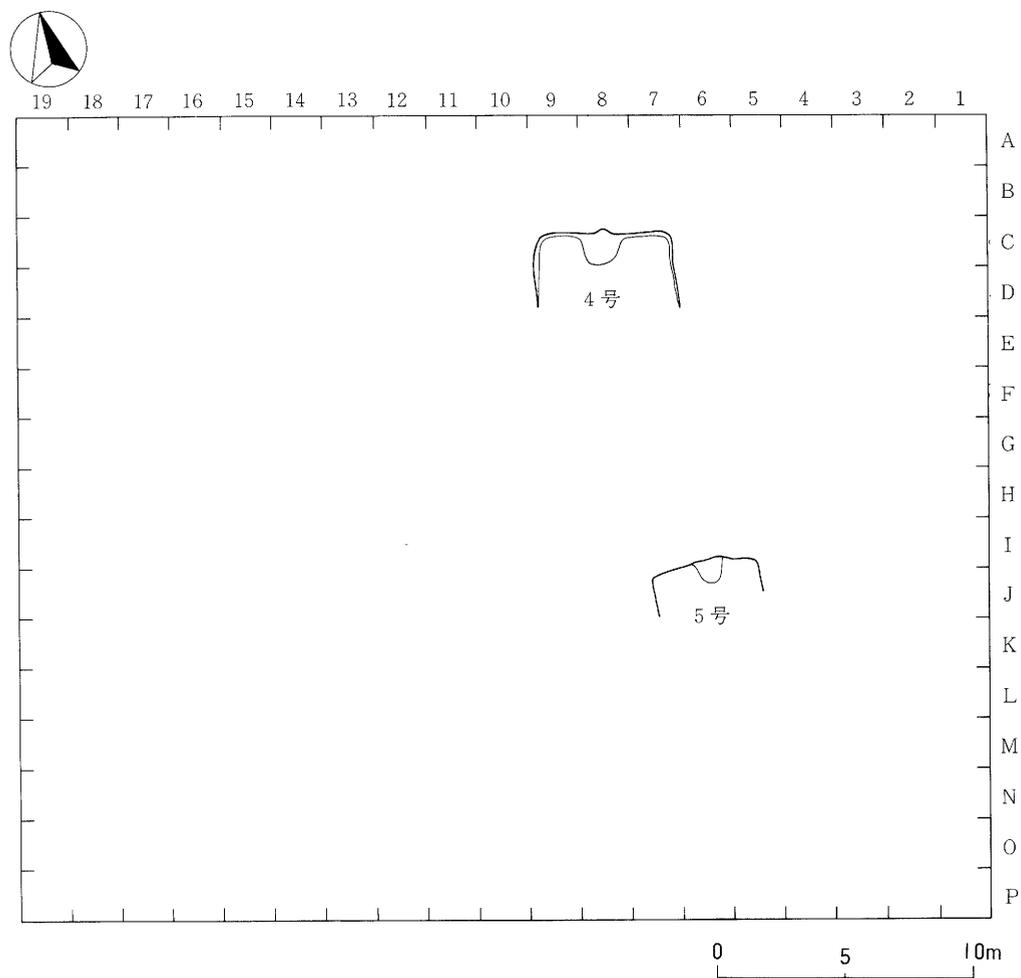
II 位置および環境

山寺遺跡は、茅野駅から北八ヶ岳の麦草峠を越えて佐久方面に通ずる国道299号線の沿線で茅野からの距離約4.8kmである。一帯は八ヶ岳の火山活動により形成された広大な裾野で、これを八ヶ岳山中や山麓より発する河川により東西に長い溪谷が発達して長峯状の台地に区分する。台地上には集落が点在して、北山浦と呼ばれている。この山麓のほぼ中央の台地に南大塩部落があ



第1図 地形と発掘区 (1/7500)

り、その北側の浅い溪をへだてて山寺遺跡の立地する台地がある。山寺はかつては戸数30数戸の集落であったが、近時団地造成等により住宅が急激に増加しつつある。台地の南斜面は畑に、溪は水田に耕作されている。台地の南縁に森を擁して白山・八幡の二社が祀られているが、白山社はこの山麓一帯に設けられた信濃十六牧の一つである大塩牧にゆかりのある神社ではなかろうかともいわれている。台地裾の各所に湧水があり、これが八ヶ岳山麓では早くから稲作が行われ、平安時代のむらがつくられた所以であろう。遺跡の標高は915 mである。白山神社の末端は溪に面して張り出し小丘状を呈し、ここからは縄文時代中期の遺物が出土する。尖石遺跡は南大塩台地の上方にあり、山寺遺跡と同じ等高線上には権現林遺跡が、更に南の台地には日向遺跡がある。



第2図 発掘グリッドと住居址位置図

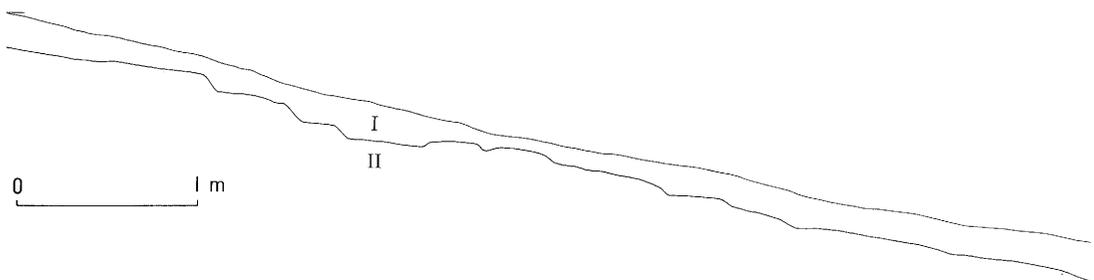
III 発掘調査の経過

山寺一带は国道沿いで交通の便のよいところから近時急速に宅地化がすすみ、八幡社周辺はすでに数年前から住宅が建てられていた。遺跡の範囲と目される八幡社上から白山社にかけてはかろうじて宅地造成が避けられていた。しかし今回ここに三恵不動産商事が宅地造成を行うこととなったため記録保存を目的とする緊急発掘を実施することとなった。幸い三恵不動産商事神林功氏の理解と協力を得ることができて同社の委託により茅野市教育委員会が発掘を実施した。

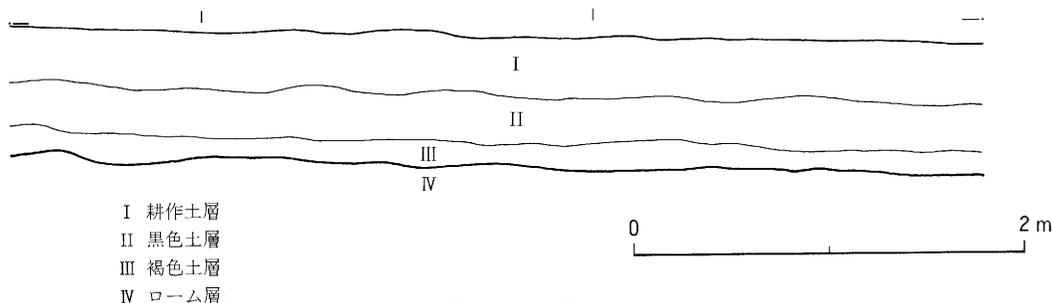
作業は昭和56年11月9日に開始された。発掘区域はすべて桑畑であったためその抜根にブルドーザーを用いたが、土層の関係で桑株を抜去することができない部分が多く、その抜根作業に思いがけない労力が費された。11月15日茅野市教育委員会主催の文化財教室が開催されて、第4号住居址を対象に市民参加による実地学習が行われた。12月3日現場における作業を終了したが、その前日2日には初雪が遺跡一带を覆った。

IV 発掘区の土層の状態

山寺台地は八幡社までは比較的南斜面が急で、その中段を国道299号が通じているが、八幡社上約25mで台地は南側に張り出し斜面もやや緩かとなる。ここが発掘地である。斜面の地形に即して東西38m南北32mに2m四方のグリッドを設定した。発掘面積は1,216㎡である。発掘区は南傾する斜面で、グリッドA～Hまでは勾配約10度で次第に緩かとなり下段において平となる。傾



第3図 土層の状態



第4図 土層の状態

斜面では第I層が耕土層30~40cmで直ちに基盤のローム層となる。耕土層は色調やや褐色がかった粘性の乏しいさらさらとした土質である。黒土層は流失し、また常に耕土層も流されるため斜面中段では黒土層の上にこの褐色がかった耕土層が載っている。グリットI~Lでは第I層耕土層が30cm、第II層黒土層が25cm前後、第III層の褐色土層が10~15cmで基盤のローム層となる。発掘区下段ではグリット東ではローム面までの深さは85cm、西にしたがい次第に深くなり、0-17ではローム面までの深さは100cmを計る。

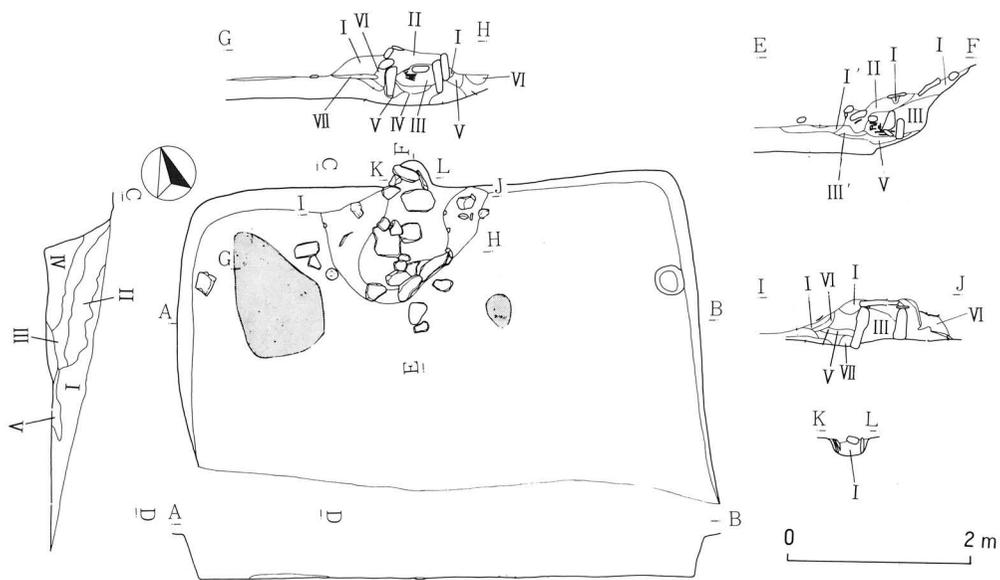
V 遺 構

今回の発掘により発見された遺構は平安時代後期の住居址2基である。3基の住居址が発見されているので4号、5号住居址とする。

1 第4号住居址

南傾する地形に即して構築された住居址で発掘区の斜面上方に位置し、勾配は約 10° である。したがって北壁は深く掘られるが南壁を欠き、南床面を張床とする半竪穴住居址で、主軸方向はN- 14° -Eである。張床は耕作により欠除しているため住居址の奥行は不明である。プランは奥壁の幅5.4mの長方形を呈する。奥壁の高さは63cmで、東西両壁は地形に即して次第に低くなり奥壁より3.4mにて消失する。奥壁のローム層の状態は上層30cmは黄褐色ローム層、中間約20cmは鉄分を含み赤褐色を呈する。下層は砂礫を含有する粘土質灰褐色ローム層で、これを15cm掘り下げて住居址の床面とする。床面はかたく敲き固められて平であるが、南側は幅64cm深さ12cmの畝状の溝により切られ、また張床は耕作により消失する。東壁に接して深さ22cmの穴が検出されたが柱穴かどうか不明である。

カマドは石組粘土カマドで、中央からやや西寄りに構築される。北壁が高いため保存状態は良好である。煙道は平な石を縦に据えその上に蓋石を載せ、多量の粘土でその周囲を覆いかためる。煙出しは奥壁の上部をU字形に欠き両側に石を埋める。焚口の幅40cm、煙道の長さ160cm、煙出し



- I 暗褐色土
- II 黒色土
- III 砂礫混入暗褐色土
- IV ローム混入暗褐色土
- V 焼土混入土

- I 黒色土→住居址フク土
- I' フク土内に焼土粒子・灰を含むもの
- II 灰混入黒色土
- III 粘土混入黒灰色土
- III' 黒赤褐色粘土
- IV 焼土・灰→火床
- V 赤褐色粘土
- V' 黒赤褐色粘土
- VI 白色粘土
- VII 灰黒色土混入土
- VIII 黒灰色土
- IX パミス状赤白粘土
- X 黄褐色粘土→埋め土
- X' 黒黄褐色粘土

第5図 第4号住居址

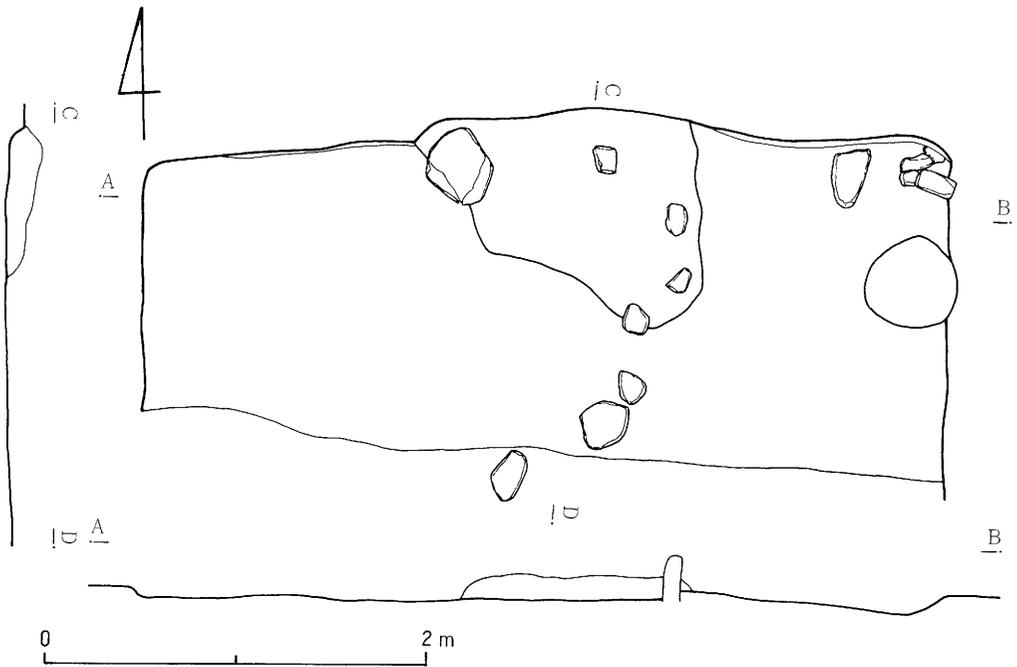
の幅23cmである。カマドの左側には床面に掻き出した灰がうず高く堆積していた。カマド右側の奥壁に接して粘土に貼りついた状態で坏2点と甕破片、また左側床面から甕が逆位で出土した。

2 第5号住居址

発掘区の中段よりやや下のI-5・6・7に発見された住居址で、第4号址との距離は9mである。地表からローム面までの深さは70cmで、住居址の床面は褐色土層中に張床したものである。北壁において僅か5cmローム層への掘り込みがみられて住居址の北部分の輪郭が確認された。主軸方向は南北方位と一致する。床面の過半部分が耕作により失われているので全体の規模は不明である。奥壁の幅が4.3mの長方形を呈する住居址と推定される。カマドの位置は北壁のほぼ中央で、粘土と僅かの石がその痕跡を止めている。遺物は僅かの甕破片が検出されただけである。

3 階段状・畝状遺構

発掘区の上段にローム層を削った階段状・畝状遺構が東西に通じ、第4号住居址の床面を切っ



第6図 第5号住居址

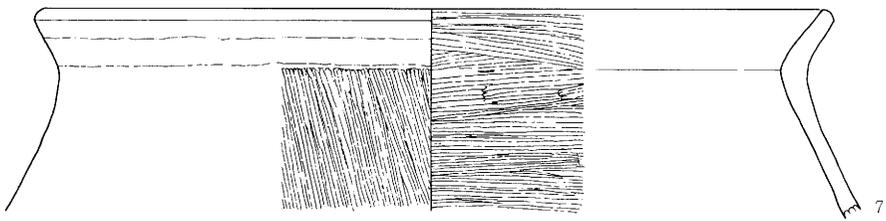
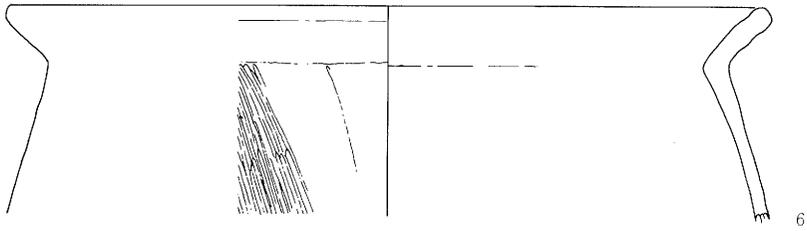
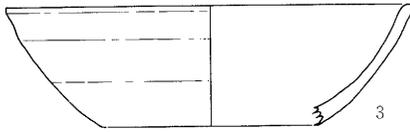
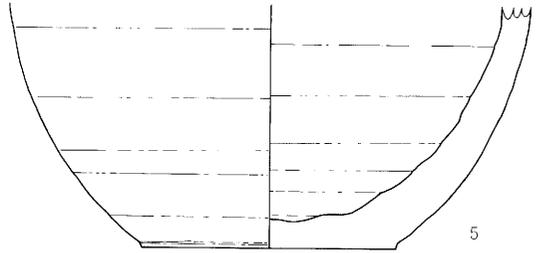
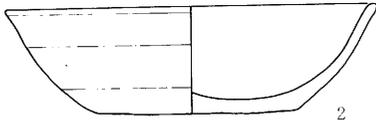
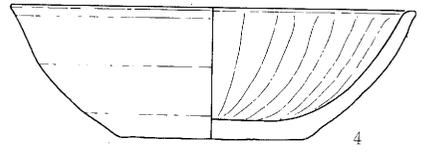
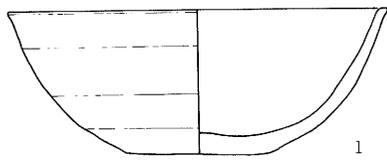
ていた。表土が薄いため耕作や桑を植えるため作った畝であろう。

VI 遺 物

第4号住居址から出土した遺物は土師器・須恵器・鉄滓である。土師器は器形の窮知される坏4点と甕の口縁部や底脚部の破片である。須恵器はすべて破片である。坏3点(1・3・4)は内黒でろくろ整形、糸切底であるが、(1)は若干凹凸があり糸切の状態は顕著でない。(5)は糸切底で、器内面の整形の際の稜がみられる。(8)はカマド内から出土した武蔵形の甕である。器厚は薄く、胴上部を横方向、胴部中程から底部へかけて縦位にヘラ削りをしている。胎土は良質で混入物が少なく、色調は赤茶褐色を呈す。(6)・(7)は甕口縁部破片で石英・雲母粒を含み、色調は赤褐色、楕状工具により器面を整形する。(7)は内面口縁部まで横位の整形痕がみられる。(9)は底脚部破片で、石英・雲母粒を多量に含み、底部に木の葉の圧痕がある。須恵器は印文のある大甕破片と坏破片であるが器形の推定できるものはない。

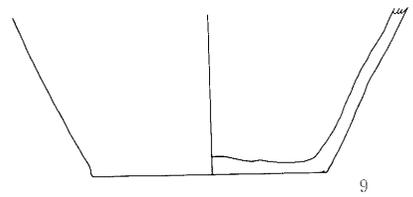
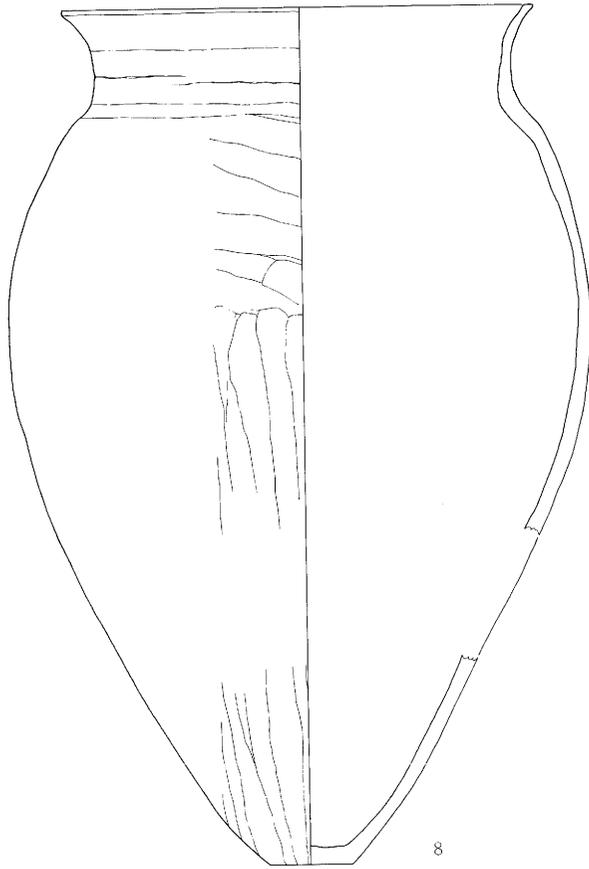
5号住居址からは内黒の坏小破片1と、土師器甕破片10数片が出土しただけである。甕口縁部破片は赤褐色を呈し、内面には横位、外面には斜め縦位の調整痕がある。口縁はくの字に外反し口唇が肥厚する。

その他発掘区から縄文の打製石斧が2点検出された。

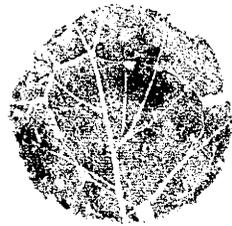


0 10 cm

第7图 第4号住居址出土土器 (1:3)



0 10cm



第8图 第4号住居址出土土器

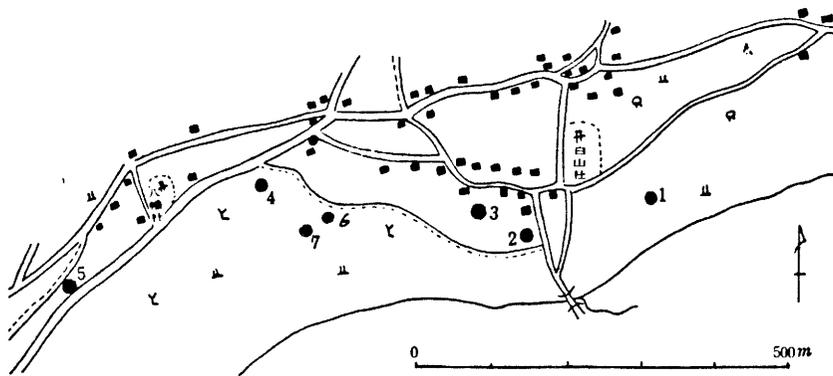
VII ま と め

山寺遺跡は過去において3基の住居址が発見されており、今回のものを加えて5基となる。この他井戸址や灰釉陶器の出土地点から白山神社と八幡神社の間の南傾斜面が当時の集落立地の範囲である。

さて、この5基の住居址はいずれも同一台地の南斜面に構築されて南を入口とし、北壁はローム層に掘り込んだ半竪穴住居址で、南床面は張り床である。張り床は耕作により欠失しているため全体のプランははっきりしないが、方形乃至長方形と推定される。北壁の中央またはやや東寄りに石組または石組粘土カマドが構築される。各住居址共に柱址が明確でない。南側張り床が耕作のため欠失しているため発見困難ということもあろうが、北壁側に対称的に柱址がないことは共通している。傾斜面に構築された半竪穴住居址のため北側の柱は竪穴の外に立てたものであろうか。カマドの構造及び位置から平出遺跡のそれと比較すると、最も後出の住居址に比定される。出土遺物は土師器・須恵器・灰釉陶器である。土師器の坏形土器はすべてろくろ整形で糸切底である。大部分が内面を黒磨きし、高台の付されたものもある。第1・第3号出土の坏には墨書のあるものや、刻線による字が認められた。第2号住居址からは須恵器の提瓶・広口壺が出土し、第3号址からは布目のついた土師器破片が出土した。以上5基の住居址から出土した土師器は国分式に比定され平安時代の後半に位置付けられる。

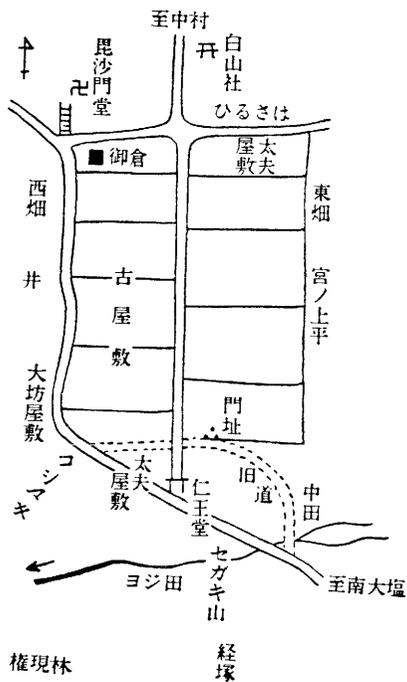
井戸址からは時代を裏付ける遺物は発見されなかったが、その構造や出土層位から平安時代住居址との関聯を考えてよいと思う。井戸址はこの他にも大正15年に、佐久諏訪電鉄工事の際に発見されている。覆土約2尺で、5寸位の角材を方形に井桁状に組み、中の方4尺深さ2尺の箱を伏せてあったという。

・ともあれ、これらの住居址と井戸址の発見は、この地に平安時代後半のかなりの規模の集落があったことを裏付けるもので、上代の村落発達史の上からも貴重な資料ということができよう。

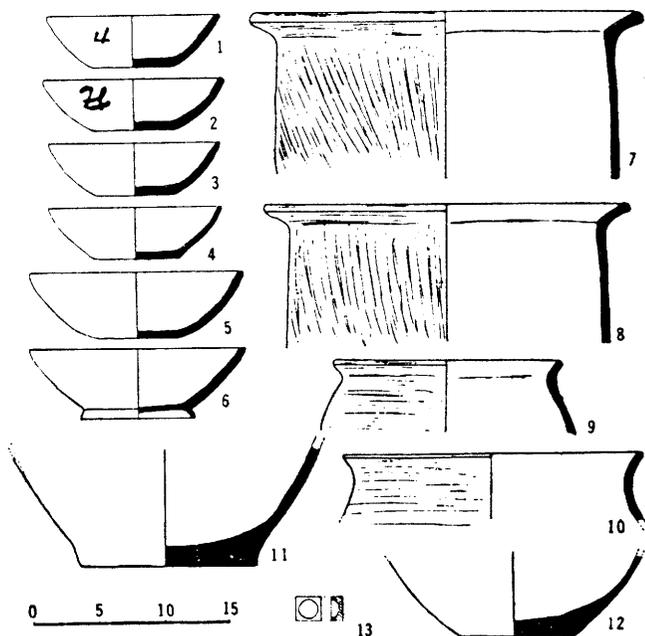


長野県茅野市山寺遺跡附近遺跡分布 (1:600)

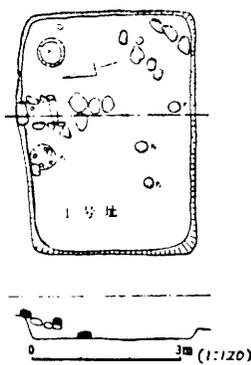
1 灰桶出土地点, 2 古井戸址, 3 第一号住居址, 4 第三号住居址, 5 第二号住居, 6 第四号, 7 第五号住居址

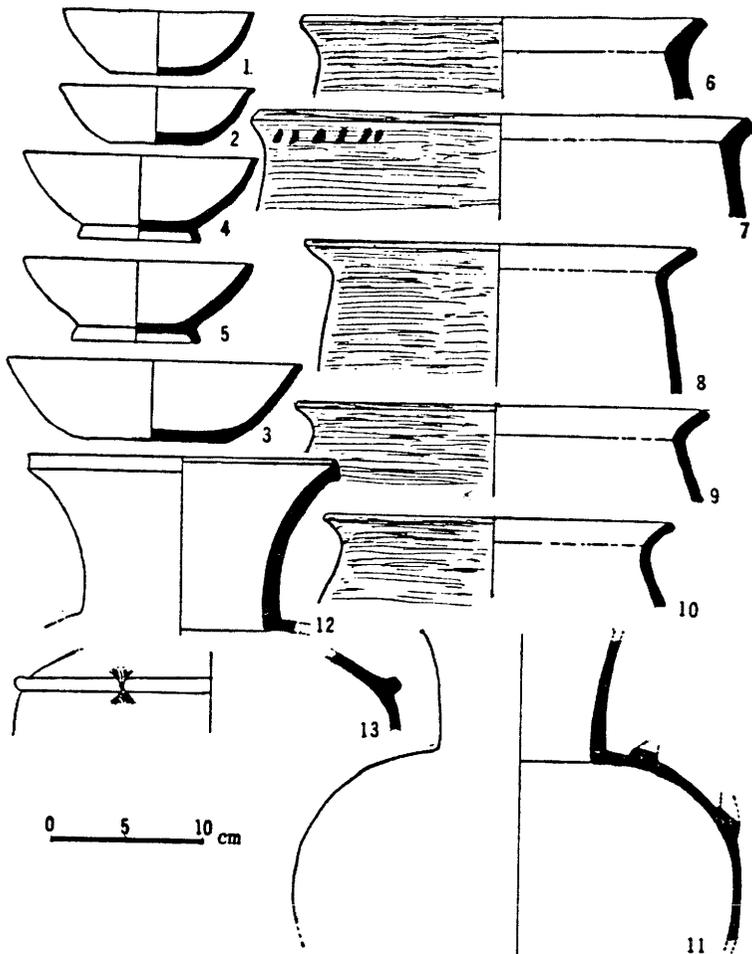
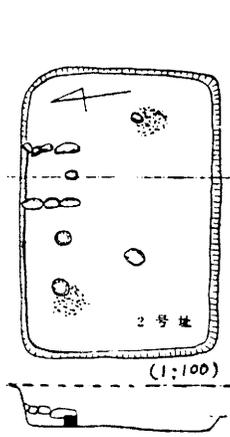


白山権現前の図

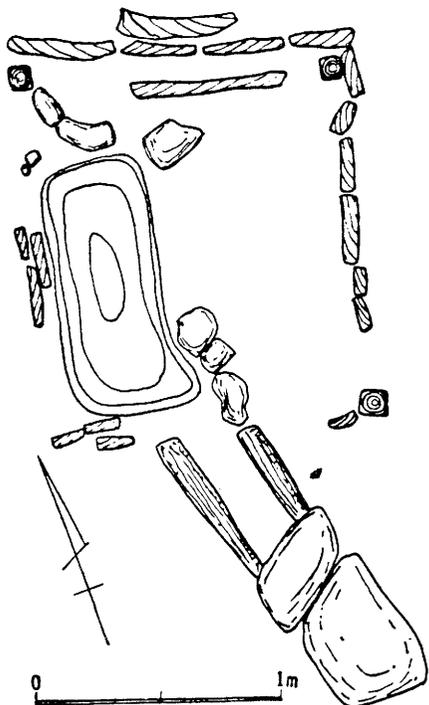


山寺遺跡第一号住居址発見遺物 (1:5)

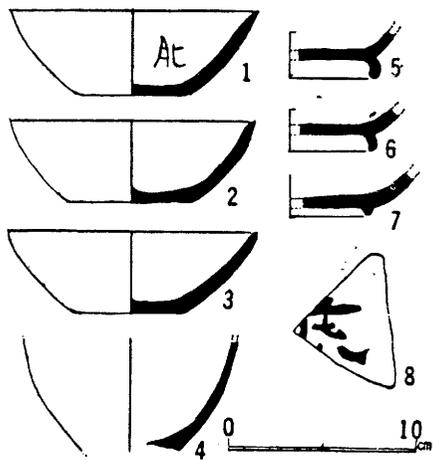
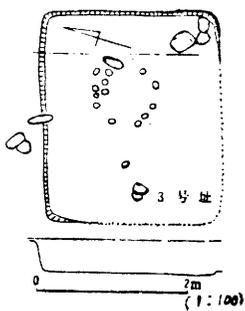




山寺遺跡第二号住居址発見遺物 (1:5)



山寺遺跡発見古井戸址 (1:30)



山寺遺跡第三号住居址発見遺物 (8のみ
に1:1, 他は1:4)



遺跡全景（西より）



遺跡全景（白山神社の森）



遺跡全景（南より）



発掘状況



発掘状況



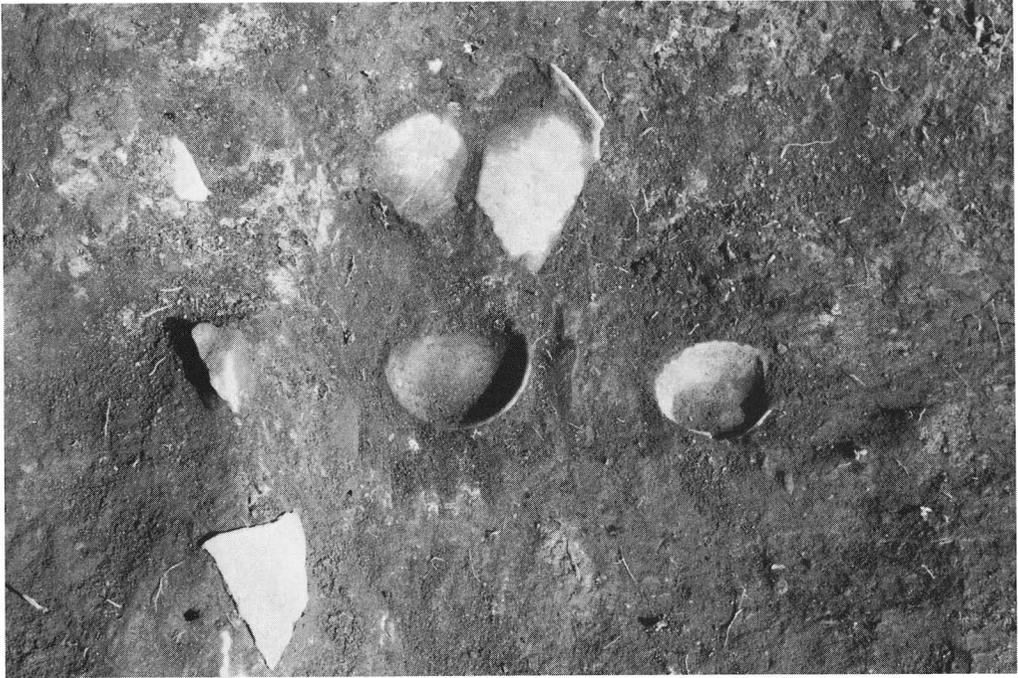
第4号住居址



第4号住居址カマド



第4号住居址カマド



第4号住居址遗物出土状态



第4号住居址出土土器



第5号住居址



第5号住居址

山寺遺跡調査委員会

- 委員長 茅野慶次（文化財審議委員長）
副委員長 福田幹人（教育委員長）
委員 矢崎孟伯（文化財審議副委員長）
" 宮坂篤夫（尖石考古館協議会委員長）
" 小平信之（" 副委員長）
" 宮坂栄次郎（市議会社会文教委員長）
" 小島与四男（市教育長）
" 牛尼忠幸（市財政課長）
" 河西保明（市社会教育課長）
- 調査員 宮坂虎次（尖石考古館長）
" 鶴飼幸雄（尖石考古館学芸員）
" 守矢昌文（美術館臨時職員・学芸員）
- 事務局 事務局長 小島与四男（教育長）
" 次長 河西保明（社会教育課長）
" 係長 竹村 弘（社会教育文化財係長）
" 係 樋口公男（文化財係主事）
- 参加者 藤森和助 細田みや子 牛山直子 唐沢志ず子
牛山節子 小平孝江 小平房江 宮坂みよ志
小平てい子 小平いく 小平富子 牛尼余志子
小平みち子 田中誠治 藤森京 牛山たま江
小林しま 牛山さく子 牛山やす子 牛山ます
牛山みえ

山 寺 遺 跡

昭和57年 3月25日 印刷
昭和57年 3月31日 発行

編集 長野県茅野市塚原 2丁目 6番地 1
発行 茅野市教育委員会

印刷 長野市中越293番地
ほおずき書籍株式会社
